



小夜寢覚・和歌新儀

伊地知文庫  
文庫20  
303



小夜寢覺見并和秋雜義

小夜寝寛

唐國のわたり春を花と我國の人を心  
り秋よ心をなすなり人々を秋を花源  
の色より身ありしる秋乃夕風となす  
終つり万葉より代この方よりと秋  
そいいしるこわれと秋の夕風となす  
花鳥のいしる夕風となす  
わたりしる心と秋の夕風  
乃と秋の夕風となす  
月は白くしる秋の夕風となす

伊地知



宵とふ存の羽風もさりあつてあまの心  
ちこそとやうなたわづらにゆるゆると  
影の散わるとして来さるる影をみよらり  
丸影の枕と祈さきこしあわれさうわら  
ふとさあせうゆもそれさきさきもゆりい  
跡を事なきこねとく人の身は胡の  
露清とわささい口さし一のわさる今夕を  
わ物さうさねこまを命さい身をばらそ百  
部とみよさきいしとねゆとゆることお  
二たさき宝命よとくかみしとさういさる

もろいさく身をたさめはるんさきと人  
とのらさひめて色みそみ群よあがりあ  
らひみきよのしじねとねとさき  
身とさきささいゆるかか固めとみよ  
さい詩をけりり酒とまきとさき  
人のらせゆるともや兼天としひ人の  
あみとけりらせあつたよ心とさき  
わさうらひんのささうと詩よとけり  
ゆりけしうらみりゆとさきいさ  
ころむらせらさくはぬりゆらねに秋さ

りしうしにねゆゆは伐とつうとやゆと  
りらうらうの葉のすまひ源氏と夜振の地  
ゆくとしとくわをいゆるやまひとあり  
ゆくとまきとされと夜振の早とまきとひれ水  
よらうし一唐とさわつひとと鈴の貝とくす  
らひゆるりやの事とよまきと一かゝ神と  
心乃水のわきたれよゆとせとゆきとひのら  
まらゆとあし一朝夕人教とまきとつと伐葉の  
申よしうまいしとわをいゆるとら事とにをく  
まらて日本紀百葉とらとらいとらとらとな

らら一せのまひす事国との境とてや  
しき一民の詞としひらひわつとらやされ  
徳と事とつとかこらと一と顯眼といひ  
人日本紀の結代ららら事れと書わ  
ら一仙覺といひ一もの百葉のららと  
とく三百金角頭なとらとらとらとらとらと  
ららら光原氏を親約といひ一田舎人水  
源抄ふ十余巻をけららてしとららら難  
儀とまららわらとららららら中とら  
ひららららららららららららららら

はせいしんりら事よわす佛林乃神こ  
まけくくくして一途よまらりゆくくを  
ゆいゆり是ハリ中きき守られとも名をわ  
ちくくくきし神いのち前めなりくこれゆわ  
ゆりゆりゆりくくくくくゆりゆりゆりゆり  
後漢院院いもの代わともまきくく  
くしあやうりあき道とをきくくせゆひる  
よくくくくゆりけくくゆりゆりゆりゆり  
も百葉ハみあゆりなまゆりすかしくもゆり  
るやいとれあつるまき事く後成定家なる家ハ

なまきしとくく百葉とはりてわいゆりゆり  
と我依也乃わられれ右のゆりれをゆり  
りくと而親あてまといふ名寄この人くら  
万葉よりくく語もゆりゆり後鳥羽院も寄  
乃心とゆりくくくゆりゆり集くくくく  
ゆりゆりゆりゆり又ゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
白氏文集ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
京極ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

又さ長乃弁と語氏よりいふ事なりと云ふ事  
事心より弁も初も母の如くとも物わ  
まうきとそ明徳統乃の如くともわき  
ゆるいづれ事ありにゆらり又連弁と  
いふ事弁信人のいふ事より是も  
いふ事とそわきゆる為氏に日本乃の如く  
とて國人はゆるいふ事と我身は連弁乃の如  
くもや人の國よりとわらふ事と相言  
しとれりや後多羽院乃の如くとも  
連弁乃の如くともは押弁乃の如くとも

わらふ事と連弁ととも事なりと云ふ事  
ゆるいづれ事ありにゆらり又連弁と  
いふ事弁信人のいふ事より是も  
いふ事とそわきゆる為氏に日本乃の如く  
とて國人はゆるいふ事と我身は連弁乃の如  
くもや人の國よりとわらふ事と相言  
しとれりや後多羽院乃の如くとも  
連弁乃の如くともは押弁乃の如くとも  
わらふ事と連弁ととも事なりと云ふ事  
ゆるいづれ事ありにゆらり又連弁と  
いふ事弁信人のいふ事より是も  
いふ事とそわきゆる為氏に日本乃の如く  
とて國人はゆるいふ事と我身は連弁乃の如  
くもや人の國よりとわらふ事と相言  
しとれりや後多羽院乃の如くとも  
連弁乃の如くともは押弁乃の如くとも

念はれわき花のりも此詞弁よふらひ  
くはきく弁のやうよ面をさうさうと  
ゆるも子細わらうきく弁の毒とて一向  
控度道約の事いしよふらひきく弁よ  
しう詩ゆゑ人の聴句端よいしよさう  
とてきく弁の連歌といききく弁人知  
のちりしう控用も約のりれは心は  
くちりしう人人の連歌さうさう道約也  
さあ人きくさく又きく判の詞よふれも  
とく道の人さうわ事よなるのきく

いふくわらひ約の後漢源院の沖時なと  
わ苗弁の弁さうも判の詞さうさうあり  
きく為家の先後源氏なとてきくはよ業と  
さうさう詞の苑とさうさうさうさうさう  
道のわらやさうわらうさうさうさうさう  
ゆるさうさうさうはさうさうさうさう  
く圓の文とさうさうさうさう判の詞と  
さうさうさうさうさうさうさうさう  
と巻後なと詩つらさうさうさうさう  
す後成定家為家さうさうはひさうさう





トモよ不足もやきくすくゆよなりとわら  
人よくゆきくすくゆよ家の内事とやわ  
らせんといふよその器をいふて事い  
ろく人をいふ世をいふけゆりあの人を  
みいふく沖のあもすくゆくくはあも  
事乃いふくあもすくゆかゆりあも  
くゆく申話も匡房部総とといふく  
みふ攝録もく大信の家の内よあも  
なりしと後をすくゆ実とありき  
邦総大納言ハ武家海のすくゆいふく家

心しすくゆいふく又廣えと云く人  
さい局く救なりぬりのあも有り  
通念乃右大おいゆくきく日本國  
乃事とすくゆいふてとる世一諸國  
地乃とすくゆいふて人のあも  
うゆりゆくゆり人とあも物  
ゆり灌頂あもすくゆいふて  
くゆい茶番の具是とあも  
てりわらとすくゆいふて  
人乃わりしとゆいふて大事あもゆり



り人のねねけりしを月一とやう  
ゆるりもめと物りうーわーちさすの衣器  
よらね申し世の事ーちわしきさうしと  
なりらうき事しわーくさる事しわ道こも物  
ららよれねを古なとこくまぬおきー  
かー國乃文ーもわの國乃日記めと徳言  
といふすを後さうしき事ーや約こ白  
とらうーあとさうーやあー約をい  
いふま乃陰おなしとよとをさうーあけ  
さうしきわーららとをさうーあけ約よ

きと人さうとやわの國めとさうーもて  
うりー成王と申し御いさも周公且と  
くいふーま存人かてー國をたさ先  
ゆるりーとわーま弟乃二人わりて徳言  
さうれー御門録よおりーあて  
よりさけ羅もつて其時南風わく世の  
申さうーくして弟あしとさうらみ枯れ田  
乃實も損さうー人周公且成王乃父の武王  
の命よさうーしとよ預書とわの申し  
了と求めわさうーと忠わう人さうらると

て居るやめ一人はよく徳養一一人は第二  
人として徳をいふこと世はかくく約  
の徳乃大おの徳母乃徳后わく大徳を  
乃そ徳をいふ人なるは徳行の時徳  
屋もす世をいふことくくく事  
をば周公且の例と病もするすき  
心もいふことき女の事と覺の徳又  
くくくくくくくくくくくくくく  
卒乃大徳の徳養一一人は水野の徳も  
わめ一人は徳養大おの徳の徳原系時

の徳一一人はよく徳養一一人は第二  
人として徳をいふこと世はかくく約  
の徳乃大おの徳母乃徳后わく大徳を  
乃そ徳をいふ人なるは徳行の時徳  
屋もす世をいふことくくく事  
をば周公且の例と病もするすき  
心もいふことき女の事と覺の徳又  
くくくくくくくくくくくくくく  
卒乃大徳の徳養一一人は水野の徳も  
わめ一人は徳養大おの徳の徳原系時

いいて佛神の法心もさかちよすもこれた  
條よ心も道約久きことしるるれ事  
わさきまらしとあ道とささふわれもさ  
誓乃人よとらさ終約ちぬ中し狂狂なりと  
いふれとそれとちりはれもあやまららる  
き中めく約とさささく人乃世のさ  
らひ各利ねりもあ事らなり一實も  
あく官位も終ららく約道とそれよ  
つげてもあつらる人もほいとみるは  
事ハ幸乃るいしれもさあ海さひひも

と道理しといささか誓乃るりくおぬ  
くおとさらんちうひとさく盗人らと  
とのわら身一人めくおわれ世とさそ  
ころあ中わらくさるるも人幸ハ息  
一四とさ人をも換一約はれもく  
うの蓋とささあ終らるもや世乃来ら  
向しとさ約もさく各同ならもいひあはし  
け道とさささるるら一難ひさるんち  
さあとの道ならも事ハあさう一はれは後保  
薄くつらさくはさもあささと終ねる

約りさく又人乃其をさす不義よる  
なる申る世の末よ多く約りや  
其とさくあけ申して父とわや  
乃事らよのつひよなき事なれ  
及らすよとららよの事とさす  
たらひるをわゆるや大よこ  
あさるいを歎くより約りよ  
なき類は其を報らり申あり  
くいそつ思ひよ事わらる者  
信といひ人わけてらわらる

るよの物なるともさけらるや浦の  
家へいりりるよ亂よれよ  
とていふくりてなりより  
おらよ沖のよりあてて國の官  
よなりては海士の家へい  
物とりさくひの心よを報  
ららぬ浦人ららるよきと  
きみなりよはよわれ  
とらるよららるよ  
とみらるよららるよ  
韓信もな

つりてきしとじくいけつとわさしと海人  
の心ももれし有るまじき事なりと我もはつら  
一飯もあましすむらふそとしりわすれぬり  
ふの心なりわさし我身なりとありとありと  
さりちりすりしと我の事やわらわらわさ  
めり口よりされりちりしとありとありとわ  
申しと心もわさしりしとありとありとわ  
きりし人なりとわさし事なりとありとありと  
人なりとありとありと俄よいなりとあり  
わさしとありとありとありとありとありと

虞舜ハ始ハ民也とありしと神の位なり  
はしと後しとありとありとありとありと  
み人なりとありとありとありとありと  
ぬしとありとありとありとありとありと  
らゆらしとありとありとありとありとありと  
國なりとありとありとありとありとありと  
家録なりとありとありとありとありとありと  
はしとありとありとありとありとありと  
もねえしとありとありとありとありとありと  
ゆきはありとありとありとありとありと







所い河一きをすく忠わりののと宿一科  
わりののと罪をうらむみかきか際り  
ありきと名利ところす賊宝ととり  
もすりしとるに國のこは異人君子金  
玉の類と教しや一やうきん人か賢者  
とて考ふれいと道徳のきよや道徳との  
申しとる世は是とあつて一途はきし  
尋常一の人めりと佛神とて心け國を  
民をよきとけされとわら身とてさす  
賄賂金もゆもくと万の申道理とて

ゆをさうさうして私にならんとる世を  
らき人ともとるに大なる代り  
らうき人とて申古らうき人よるり中  
らうき人とて申る末の世といふき人め  
わら一と唐の文めとてつらうやうは  
ゆと人いふとらりゆんこわぬいゆ  
政して國のをうらむ時とてさす  
あもさうらと事乃わら人きとて百年  
一とてい人かわぬとやせわは  
うら時一わいゆとやとてあは

又も學子らみ〜して〜やまの事と志  
きり人ともそれよ〜りて〜りよき〜りち  
ねゆ〜きしきも〜いりぬと〜りぬ人  
〜わりとも〜のつ〜道徳を〜りん  
其學問〜りりとも〜きし〜も學子あか  
〜しる理よ〜り〜ん心わ〜んを學  
問をぬ〜り〜と〜孔子も作〜り社  
山原時政〜り九代〜り〜事とも〜  
也學乃〜り〜り〜り〜り〜り  
貞親政要沖或條〜り〜り〜り

ゆきて私なく〜と〜いゆ〜り〜り  
て世も静〜り〜國も〜り〜りゆ引  
なる家り肉を〜り〜り〜り〜り  
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
と撰り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
右き〜り〜書〜り〜り〜り〜り  
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り







くまの唐國も盟とて牛の血の  
みく起債るものやうに契約しし  
きるとしてうけるもや大方考子  
もすともくも人ちうううう  
しにわく國は國のみこま  
乃血ると然しうもくもやと  
の代りううれりもわくも  
たうまのまわくも私りし  
ううまのまわくも小人ち  
のぼりまわりてきうう

くまの唐國も盟とて牛の血の  
みく起債るものやうに契約しし  
きるとしてうけるもや大方考子  
もすともくも人ちうううう  
しにわく國は國のみこま  
乃血ると然しうもくもやと  
の代りううれりもわくも  
たうまのまわくも私りし  
ううまのまわくも小人ち  
のぼりまわりてきうう



いづくわきし沖政もわれしとむりあ  
りよよふゆりらわしりさくりともや  
屋うゆりしとてしちを中とすゆり  
里さぬの初えりしゆりのこさぬゆり  
と曉の焼のすり行り園よ打とすり書  
付ゆり

右一卷以稱名院

内大臣  
公條公

正筆之本一時

書寫之畢一條禪閣御作号小夜寝覺

和歌雜義

蛙

をさるるまゝに蛙あかひさし  
をさるるまゝに蛙奥乃ほれ名をさるるまゝ  
こ川乃うらまをさるるまゝに蛙  
哥乃心まゝに蛙奥乃不りてまゝに蛙  
らとりやわんきまゝに蛙を詠ん  
不審しゆまゝに蛙を下人のゆり  
とふさるるまゝに蛙を詠ん

尚代



雜春

三月三日人乃許へらいつつとらるる  
あつたやむいよはれがらまきあいのしらにをこ橋  
くひまむ和書し可樂よ一長はよなとをこより  
わへのしらに美葉の交りや、山をよわゆふ  
し、の、後河たう河信の市路よわひ、う、を  
こよあり

屏凡の絵よま山里よ介へあつてわつとら  
野よきうらむとらう可とららるる

維子にくすはよ若からすてわさあつとらんよあは

うこ野不名しあうこれとらを去そくへつらや  
くらに為れ名し俱念とらり日本記よんこり  
わさあつひの朝よ野と踏とらし美葉もした  
まうきい、のり大野よ弱すくわさあつとらん  
持ららとあもれとらあり

和葉花とらん

楊とれわさうをあは、あまきりうれわあふおとれ  
さう、わされとらう、とら、可葉古今あ葉  
らう、あ、とら、わ、せ、とら、可葉の、あ、  
さう、わ、さ、れ、き、あ、ら、とら、とら、り、古、今、れ



物業めてさうして飯菜等を入らりきと  
ハ神奈川多岐物ありらるるに也  
さとは積と多しうれと一月のきりふ  
とんたりとととととととととととと

卯花作垣

うれ物ありね物あり山嶽のて川きりきり  
下人乃おちしとととととととととととと  
さしとき校わさあさ二本りーらしき  
てととと校わさささささささささささ  
あさわささささささささささささささ

とハ狹布ささあれあさあさあさあさ  
あさあさあさあさあさあさあさあさ

郭云

約郭云

あさささあさあさあさあさあさあさ  
あさあさあさあさあさあさあさあさ  
此里凡る一可業に諸るあさ但来<sup>キ</sup><sub>ヲ</sub>里ささ  
うか本とわり又来<sup>キ</sup><sub>ヲ</sub>書てささあさ  
と諸るさあさあさあさあさあさあさ  
あさあさあさあさあさあさあさあさ

玉枝し玉しふあひの初

雨中初云

あれは心は鳥の山のこころうらはれぬもあはよく  
頭捕心云くきこひ何鳥うと後羽巾洞一  
答て云東南院已憐寛樹云天竺巾五月許也  
里鳥有言聲妙也言若号俱在羅若  
那云欲多或人云彼已憐ノ云俱翅屏鳥又若  
俱在屏若云然云若色妙く條勿端欲定初  
云子ハ必何極系乃六鳥乃中ニ舍利多い云驚  
云ハ翼鳥ニ見奉其徒見内典云

山中郭云

時鳥をたし移やまれ推ひ来よりのそるをこまも  
移やまら一長山よ宿してあをとりて  
とと移や一ううと云い方ハ初云乃寝き  
心こりり山と云りさひなり寝

山家初云と云て

初云わあそとまれをかまやれくうもそはあし  
もやとわやこれ居(間居)雨下と云てあり  
唐人乃舎しきき人一洞乃家し云心れた  
といもや乃わき不なりうと空ハうと云









うもる我らひそありん時なるものやまれば法のおろこ  
これに涅槃種子脱而名山の童子は修行を常  
是生滅法と云文と引て未とさうんとて罪刺  
のありし身と投て後生滅之已滅滅為楽  
と云文と引んこ

水鶏

曉水鶏

きりりともお鶏なりてくさくさともおれとひひり  
清涼殿より思ふ秋の夕とてわり

萬籥

いれよはなもみぬれわやめま一あるみうやあ代り  
はとあらうと云こみ山と名り神し

石上萬籥といもの久みせとひらり五月廿日禁  
中よ萬籥の興とて興へ萬籥と稱て  
りて参し

五月廿日らんと云

わやめまふれと云れと云らあもやうの影  
ひすハ書府の百鍊鏡より五月廿日午時寝粉  
金膏磨磨盤やとりふみと録し

五月廿日夕冥心乃わらうきさうらうとてわれり

らんせんとわるとんまにいしつふりわるとんまにて  
わるとんまにかしこもなまはばあいのいあよあちの道はうへに  
うとさうともきしふ小野天神の文人とつら  
せ給つる沖時つらて有時當て充身まを意  
故園信脚に行つて

高蒲は銃つらとらてまら

みよりの馬士のきりきりまはつらまていあわめれまら  
たあつらとみよりのきりきりまはつらまていあわめれまら  
とまはつらとみよりのきりきりまはつらまていあわめれまら  
てうらなりまらとみよりのきりきりまはつらまていあわめれまら

蒲とひくとらあはしあはつらまていあわめれまら  
又云はつらとみよりのきりきりまはつらまていあわめれまら  
つらとみよりのきりきりまはつらまていあわめれまら  
てあはつらとみよりのきりきりまはつらまていあわめれまら

左右近駢射

あつらとみよりのきりきりまはつらまていあわめれまら  
うらとみよりのきりきりまはつらまていあわめれまら  
のあつらとみよりのきりきりまはつらまていあわめれまら  
あつらとみよりのきりきりまはつらまていあわめれまら

早苗

あつらとみよりのきりきりまはつらまていあわめれまら  
あつらとみよりのきりきりまはつらまていあわめれまら  
あつらとみよりのきりきりまはつらまていあわめれまら  
あつらとみよりのきりきりまはつらまていあわめれまら

い弄ハ万葉集ノ奇ニ云いらくそそわす人  
つと神ノ云珠ノ玉蔭うれしとと  
としる音とねりひて 傍なりうすの跡  
馬ノ危れとめとわすれしといふ十半  
てく奪し年つらりえりといふつくり  
ひときしうりハ神酒し年方ハ氏神と  
方とあきとらと田ノ神奈りいひよ  
て 傍元万葉ノハ坂上命母倍奈大伴  
神時ノゆり方ととくすもを察と  
あり後頼髓脳云うすのつくりと大  
豆と

はくめよてうすのわらわてうりめと  
うありてこの方めとつとに  
なうつるあこのわらわとてうや田のさ  
なりつると下臈ハ酒りといさうす  
水窮ハハ盡と流してのわらわと  
となうすといひつハハあこの家  
ころんむりのとらあうりしりハ酒  
うや田ハ名を田とてけとのみ  
苗ととりやうれと後

あさいしと書とこそとれり  
はや竹田のさるうら

芥川ハ不名ニ漢漢也とありこれハ漢漢野の行  
幸との芥川ハ行幸と書シ字也と云ル此山  
みゆふきえぬ一可り川のなりと云り今の字  
を名羽一也と云シ或人芥川ハ行幸と云  
羽乃南ありと執人ゆり極まる乃由極な  
也一すれをそりやゆちんたふれとい  
て乃ち心ハ一定漢漢也

照射

照射一云々と云ふこと云事と

わとよんとのの麻れこい一と云ふこと云事と  
也の一と云ふ一ハ麻の目と云り一の也よみわと  
と云りなりそれと云ふこと云事と云ふこと  
人の語へ入と麻と射よそ人云事なり

鴨川

鴨川

うり火のわもよれいすたふいといふこと云事  
きりの鼻と云ふこと云事といふこと云事  
いふこと云事  
うすたふいすたふいといふこと云事  
と云ふこと云事

くせの奥のゆるへら〜と〜と〜と〜と〜と  
白縄引と云こ〜これは鴉川な〜と〜と  
家より〜

五月雨

五月雨のゆるゆるのわをれつとひい〜と〜と  
るり〜小野のあつあつ〜と〜と  
わ〜い〜と〜と〜と〜と〜と  
つ〜と〜と〜と〜と〜と  
そ〜と〜と〜と〜と〜と  
ほ〜と〜と〜と〜と〜と  
お泉或アおま〜と〜と

〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
かりそ〜と〜と〜と〜と〜と  
みろ〜と〜と〜と〜と〜と  
あ〜と〜と〜と〜と〜と  
い〜と〜と〜と〜と〜と

瞿麦

〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

くさぬのゆりともて可染よふらぬり

雨中豊麦

いぬへらりともたさいといひ道ぬよまわれぬまうこれ花  
古弁一々らりともたさいとておれぬ  
ふしらさいとわらぬところららればは  
弁もく傍し但は弁と弁もせはともらの  
とれともよとてわらふらりといとも  
いりしわらりともといひてうらふしこれ  
物衆草一故曰梅みきれともとて  
ともよいみよらせとてらり妖艶卑とも

故曰常交れともひとておれぬ  
たらりともいひとわらりとも  
いともとては花の地又わらりとも  
ともいひとては花の地又わらりとも  
ともいひとては花の地又わらりとも  
ともいひとては花の地又わらりとも  
ともいひとては花の地又わらりとも  
ともいひとては花の地又わらりとも  
ともいひとては花の地又わらりとも  
ともいひとては花の地又わらりとも

豊麦帯

物象のぼよめるものごとくあふれつゝ愛のたゆみ  
あふれしうらやまを帯よつてくさすなり  
磯<sup>いそ</sup>塩<sup>しほ</sup>の<sup>しほ</sup>大和國<sup>おほなづま</sup>の<sup>しほ</sup>あふれは<sup>しほ</sup>す<sup>しほ</sup>なり  
ふととくよきなり

泉

うら<sup>うら</sup>井<sup>い</sup>の<sup>い</sup>下<sup>げ</sup>け<sup>け</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>き<sup>き</sup>き<sup>き</sup>な<sup>な</sup>け<sup>け</sup>こと  
曝<sup>ひら</sup>井<sup>い</sup>ハ<sup>ハ</sup>方<sup>かた</sup>葉<sup>は</sup>く<sup>く</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>汗<sup>あせ</sup>觸<sup>ふ</sup>れ  
と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>き<sup>き</sup>也<sup>也</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>わ<sup>わ</sup>す  
り<sup>り</sup>井<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>い<sup>い</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>わ<sup>わ</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>わ<sup>わ</sup>す<sup>す</sup>は<sup>は</sup>わ<sup>わ</sup>す<sup>す</sup>  
り<sup>り</sup>井<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>い<sup>い</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>井<sup>い</sup>管<sup>かん</sup>く<sup>く</sup>巖<sup>いわ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>井<sup>い</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>也<sup>也</sup>

聖井凡云

泉為友友

き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>市<sup>いち</sup>ね<sup>ね</sup>も<sup>も</sup>う<sup>う</sup>志<sup>し</sup>の<sup>の</sup>深<sup>ふか</sup>く<sup>く</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>わ<sup>わ</sup>す<sup>す</sup>  
き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>市<sup>いち</sup>ね<sup>ね</sup>も<sup>も</sup>う<sup>う</sup>志<sup>し</sup>の<sup>の</sup>深<sup>ふか</sup>く<sup>く</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>わ<sup>わ</sup>す<sup>す</sup>  
う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>わ<sup>わ</sup>す<sup>す</sup>は<sup>は</sup>わ<sup>わ</sup>す<sup>す</sup>

雑文

山<sup>やま</sup>星<sup>せい</sup>の<sup>の</sup>や<sup>や</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>ひ<sup>ひ</sup>い<sup>い</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>月<sup>つき</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>り  
い<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>聲<sup>こゑ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>わ<sup>わ</sup>す<sup>す</sup>は<sup>は</sup>わ<sup>わ</sup>す<sup>す</sup>

後月

あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>の<sup>の</sup>ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>月<sup>つき</sup>を<sup>を</sup>影<sup>かげ</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>り



わらさぬのちれはに紫さきふひつとふり  
六帖乃奇云わぬすひふらうわ  
らさぬのちれのみひよわひそくれ又  
萬葉のわらさぬの屋へさくしよ  
考りわらさぬとあり年しわり  
辭去也

秋部

七夕

ひらよふいそわひさくきわつこのちそや人のねそめ  
此奇一人間五十の下天一昼長と云ふよ

名所なりいうとふぬす也

とりにしよよいしよ香らふりいさひなりれわ  
は奇ハ長恨舞乃七月七日長生殿長生人  
松若河在天願為は習鳥在地願為連理枝  
云んを録

きまらふぬのまてれおひりよるあまふり  
万葉云ひさうこのあめりまてとみる  
るさくまか神せのうと天吊と成  
天くさくさあまふりいさひなり

れいぬれきれさくまよとせとらとわらぬらさき

君の心はむとふきわらふとまじしつらに  
いふと離しとあり七日の朝に  
いふとわきまふとありあをよふとあり  
いふとわきまふとありあをよふとあり

萩

嗚呼萩の女とハ同き心なりといひて深き  
心もわたりうれしきものなり世にれ世間不  
思議の事のみ也とありをすふとあり  
たほよりそぬすふとありあよそぬ

すふとありとありいふなりとあり  
むら萩のこりうとありをみる  
ふらなりとありをいふとあり

秋情寄萩

秋をよとありとありははらわらとあり  
をらとありにほらわらとあり  
にほらわらとありとあり  
をらとありとありとあり  
せんときとあり旋歌

とありとありとありとありとありとあり





かしらうり

うらみのいふはなをくらりくらりぞれをあらそひのたし  
衣染をくらうらあそひてよりのくらあ

雨中草花

あらしのよあそほつてこられのつやにうつらぬの  
真態をくらみくらりの也うらむと又音うらむ  
れしたよのうらむのむらむいよあり万葉云  
とすれ草わらうらむのむらむつあふれむた  
めのうらむのむらむいよありむらむのむらむ  
れ間隆深云れむれ膝草を何れ字ま

隆深後人よ儲て云万葉むらむれむれ三汗草云  
こらむれ膝草不得意万葉うらむらむとま  
今葉よむらむのむらむのうらむとまむらむ  
むらむ万葉のむらむと二角うらむいあむらむ  
うらむとまむらむ又むらむとまむらむと  
後人よむらむとまむらむとまむらむとまむらむ  
葉集むらむとまむらむとまむらむの草とまむらむ  
れなりとまむらむとまむらむとまむらむとまむらむ  
海なりとまむらむとまむらむとまむらむとまむらむ  
とまむらむとまむらむとまむらむとまむらむ

作はためれ玉降草の夏頭水降有御案  
別下は送也

又或人お借云臆西上人の説法は鬼の心  
とそしりありありきも有万葉年也

鷹

おろしとねとある説はすもむつしむさおそいおれ  
とよもハ落こいると申さぬいさぬよわつ可  
ていふありわつしとと雨をつむと云用云  
とらんとわしとありわつしと万葉の常の詞  
秋のそれわととられとられとられとられとられ

丁の書はゆつとと及故とらり秋の田とつら  
中は穂とらへむ料し又び弁の詞は田とめて田  
つらとらわとらりるのなふてきつとらとら  
ひとらとらとらとらとらとらとらとらとら

麻

繪とらとらとらとらとらとらとらとらとら  
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとら  
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとら  
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとら  
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとら







いれりしころこそ日年祀より変たなりて候  
夏あてわれしころいみれりしころありふも  
てしられはみこ道とは品ありれ面をいりた  
きりりし又文時ひ水乃おりし月のころむと  
みりりしころしころあり水び夏すさる

八月十五夜

ひよらつるころしころあり月乃女父のちやいひん  
りりつふの所殺信濃國よわりひよらつ  
しころ約ひよらつる候とて因書りあり  
いよらるてつりつとをき

らやあてしころいれ秋の月はあちあちのちやありと  
病の地守のあちあちのされは葉乃あちとあり

乾明月

昔ししころ月も夜あちの月されしころいよらるは  
よらつるころ長は月は年は留月夏し  
月られしころ神うらふあちよあちとつりせ  
あちとすれひれの神乃つらわこ万葉のちよ  
ねねむらしすれみ神のつりしころいよせれ  
とられしころしとあり

拾遺

松風の暮に秋のきひよよ来りたり玉川のさし  
玉川の跡をいさす衣のついでよわなぬや  
うふふのなをひきよせうし又件の跡は  
松わえしととふいさす

菊

九月の白く菊していさすてふと人のやれ  
よれり

らりこよそをいさすはれをいさすはれ  
らりこは落朝しと朝の常くはみさうら  
和音くは仍名詞をて録し過なりと

ふみ物なれしと録お別の夏に宿世と云詞と  
常よあるる氣也といふこそ中古より録  
つは他古音よいさす風くはみさうら朝  
くはんといさすはれり又者世も古音にあり  
ゆりちれと可染よありみやうのす  
さそりちほりちれととありさうら  
おののほをれりちあよとととありら  
いさすさやのまはらうほをれりともあり  
いさすすすにむいさうらほをれりともあり  
其花とさうほよとて表をさうれを撰

菊の却むの葉も不て有換と侍也

竹のさうらうさうくとかきつけて秋のしほじ歌と侍  
さめとは竹葉と云し

紅葉

さくらねあさぬのけし結らねさうらうとさうらう  
あささうらう山 佐法まさうらう常は煙立不  
而後河乃富士の山と常は煙立不めく  
あささうらう使の山よれさうらう秋を後河乃大の  
秋とさうらうあさぬをさうらうさうらうさうらう  
士法不河不なりとさうらう人ゆ又ね 僻更

田とあささうらうさうらうさうらうのほりてわきひさうらうに  
さうらうのさうらうさうらう

りつそらうさうらうのさうらうさうらうさうらうさうらうさうらう  
百葉まうつてらうさうらうのさうらうさうらうさうらうさうらう  
さうらうのさうらうさうらうのさうらうさうらうのさうらうさうらう  
おさうらうさうらうのさうらうさうらうのさうらうさうらう  
又云葛本の清津彦さうらう葉本いと憑やよみ  
わられさうらうとさうらうと葉さうらうひとさうらう  
さうらうはなれさうらうひとさうらう田とさうらうさうらう  
らうさうらうさうらうさうらうさうらうと縁願ひさうらう

見可思まじく

いさやまいさやまじくもさうな草のまのてらさうり  
いさやまいさやまじくもさうな草のまのてらさうり  
わさうすのあめさうもさうやいりよあさうん檀のれ  
きらえはらさうのりみらさうてあつよあ  
のゆのさうさうねさうさういさうさう  
本はれさうさうや

さあそのまのめいさうよりみらさうとあさうさう  
檀と草よさうてぬさうみ知まさと草よさうて  
わさうさうさうさう

をれかあさうのさうさうさうてはるさうさう  
万葉さうさうさうさうさうさうさうさう  
あさうさうねのさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさう

雑秋

さうさうさうさうさうさうさうさうさう  
葉のさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさう

秋田

山にふそいあつきりとした風をよまて袖あつし  
きりとした縮乃多し他つねまらりとした糸  
をとりとしたしよまや巾集めとらりとした  
とらふさうの半とわれと糸の袖あつし  
らとてとりとしたらるにりやわらんめきあま  
ひられとちりとしたきりとしたとらふさうのや  
他人の糸云と例にほくとり

田つり

らふ身ま向の糸ねきりとしたとらふさうの縮あ  
まねの縮縮ひひすつら田のひひしたとら

万葉一ハ引板とらり方云とらりてに水法  
つくとて一人一田を引板われしてしわまき  
とらふさうの万葉一とらふ

いぬり

ねほらまきとらそのたひひとらひもじいぬとら  
らそのこわら一とら縮のまきとらす縮の  
実の縮と縮をまき日本紀。縮縮とまてとら  
一とら

九月書

種れ勢の今とらねれとて先かね



くありよをうひやうせんすまんと徳く

水鳥

水田水鳥

あきあきとむすむす水鳥水鳥のうらむいふれはふたあんな  
いふふのきふといふ石田のあのみありてうす  
ねとを田といふくむうそせうらふ

細代

うらむのきむあうらうらむて

いふふとすふふむむあんないふふのあひあひあひあひ  
いふふのあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ





